

Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名: 国際収支(2010年4月)
～輸出は依然として好調～

発表日2010年6月8日(火)

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 副主任エコノミスト 藤代 宏一
TEL : 03-5221-4031

	月	原数値 経常収支 (億円)	貿易・サービス収支					所得収支 (億円)	季調値 経常収支 (億円)	貿易・サービス収支						
			前年比	貿易収支		サービス収支				前年比	前期比	貿易収支		サービス収支		前期比
				前年比	前年比	前年比	前年差					前期比	前期比	前期比	前期差	
	9月	15646	▲46.5	▲89.6	▲81.9	77	4.9	10624	▲7.4	3402.1	赤字	▲460	4.7			
	10月	9796	▲55.6	赤字	▲88.1	365	▲15.9	10457	▲1.6	▲58.1	黒字	369	▲6.7			
	11月	6236	▲63.4	赤字	赤字	643	▲15.4	7716	▲26.2	358.8	赤字	227	▲3.6			
	12月	1629	▲89.7	赤字	赤字	215	▲27.5	5534	▲28.3	56.3	19.2	▲1414	▲4.4			
09	1月	▲1327	赤字	486.4	赤字	392	▲31.5	5279	▲4.6	▲9.7	15.1	828	▲6.1			
	2月	11348	▲54.9	▲92.5	▲80.9	▲263	▲34.1	7734	46.5	▲52.5	黒字	▲476	▲2.8			
	3月	15346	▲47.1	▲87.1	▲89.8	782	▲13.3	8795	13.7	12.6	赤字	327	16.2			
	4月	6606	▲52.3	赤字	▲72.1	▲348	▲18.3	8488	▲3.5	▲77.4	黒字	292	▲15.4			
	5月	13114	▲33.8	▲48.8	▲20.9	▲1341	▲24.9	10563	24.4	黒字	251.4	▲461	▲1.9			
	6月	12794	171.3	25505.3	143.9	1265	49.8	16110	52.5	127.1	31.0	1133	25.3			
	7月	13292	▲15.3	81.0	41.9	▲610	▲24.5	11847	▲26.5	▲28.9	▲2.9	▲1074	▲24.9			
	8月	11829	11.5	黒字	黒字	60	▲24.5	12036	1.6	22.7	▲2.8	830	▲2.2			
	9月	15767	0.8	241.0	88.9	1193	▲27.4	12375	2.8	▲20.8	▲30.4	739	11.2			
	10月	13950	42.4	黒字	586.2	▲725	▲30.0	14632	18.2	94.4	128.1	▲1651	▲5.8			
	11月	10993	76.3	黒字	黒字	39	▲13.8	12536	▲14.3	▲27.6	▲32.3	968	▲3.9			
	12月	9156	462.1	黒字	黒字	1805	▲34.2	12494	▲0.3	22.0	9.9	384	▲10.1			
10	1月	8998	黒字	黒字	黒字	525	▲8.1	17093	36.8	72.7	69.6	▲408	9.1			
	2月	14706	29.6	900.6	295.1	429	▲22.2	10675	▲37.5	▲57.9	▲45.5	▲522	▲9.7			
	3月	25342	65.1	606.7	745.6	▲126	▲2.6	17731	66.1	79.0	56.3	▲153	41.3			
	4月	12421	88.0	黒字	414.2	25	▲10.7	13796	▲22.2	▲16.0	▲8.8	▲305	▲18.6			

(出所)財務省「国際収支状況」

○4月の経常収支は前年同月比+88.0%

4月の経常収支は1兆2421億円(原数値)の黒字と、概ねコンセンサス(1兆3000億円、レンジ1兆0600億円～1兆5906億円)どおりの結果となった。経常黒字が前年比+88.0%と増加したのは、好調な輸出に支えられた貿易収支の黒字拡大によるものであった。一方、所得収支は9460億円の黒字と前年に比べ円高が進行したことが響き前年比▲10.7%となった。

次に、季節調整値で見ると、経常収支の黒字は前月比▲22.2%と減少に転じている。貿易・サービス収支の黒字も小幅ながら減少したが、主因は所得収支の大幅減によるものだ。ただし、所得収支の黒字幅縮小は後述のとおり、税制改正の影響が大きかった。したがって、経常収支は引き続き回復基調にあると判断してよいだろう。

○貿易収支の回復が続く

経常収支の内訳をみると、貿易収支は8591億円の黒字(前年比+414.2%)となった。輸出を地域別(通関ベース)に見ると、中国を中心としたアジア向けの回復が続いている。中国が旺盛な需要を背景に回復を続けていることに加え、他のアジア勢も各国政府が実施した景気対策によって回復基調が鮮明化している。また、米国向け輸出に関しても、リコール問題が懸念されたものの特に影響はみられず、全体としては持ち直しており、ひとまず安心できる内容であった。

輸入については、生産の回復など国内景気の持ち直しより増加はしているが、輸出に比して伸びは限定的なものに止まっており、好調な輸出により貿易収支の黒字幅拡大が継続した。

サービス収支は▲4255億円(前年差+25億円)と、赤字幅が縮小した。「その他サービス」にて赤字幅が拡大したものの、「輸送」「旅行」の赤字幅が縮小したため、全体としては赤字幅が縮小することとなった。

所得収支は9460億円（前年比▲10.7%）と黒字幅が縮小した。円高、海外金利低下などにより依然として前年を下回る水準での推移が続いている。季節調整値で見ると前月比▲18.6%と大幅に減少しているが、これは税制改正による影響だ。2009年4月より海外子会社から受け取る配当金が非課税になったため、年度末である3月には直接投資収益が大きく膨らんだが、今月はその押し上げが剥落したにすぎない。この影響を除くと、所得収支は横ばい圏内の動きとなっているといえる。

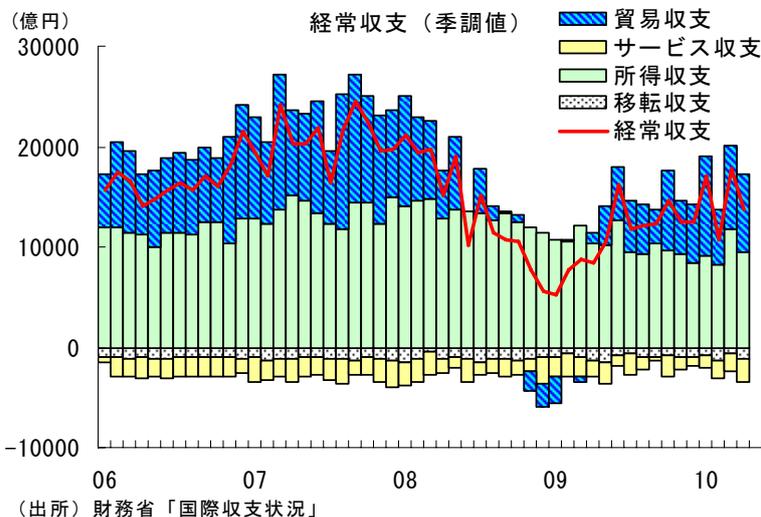
○先行き経常収支は、貿易収支の改善を主因に改善傾向が続く公算

経常収支の先行きについて展望すると、貿易収支の改善を中心に緩やかな回復が続くと見込まれる。輸出について、先行指標とされるOECD景気先行指数が足元で改善のモメンタムを鈍化させる一方、米製造業ISM指数・新規受注は高水準を維持していることから、輸出の増加幅こそ縮小するものの、増加基調そのものは継続するだろう。信用不安問題で揺れる欧州向け輸出は4月こそ好調であったが、問題が深刻化した5月以降の動向には注意が必要だろう。ただし、輸出に占める南欧諸国の割合は1.5%と決して高くはないことから、輸出の急減速を招く可能性は低いと見る。一方で、国内景気を見ると、雇用・所得環境が最悪期を脱し個人消費に明るい兆しが見え始めているものの、輸入の回復は緩やかなものにとどまろう。したがって、好調な輸出のもと貿易・サービス収支は回復が続くと予想される。

次に、所得収支は、横這いしないしは緩やかな減少が予想される。世界経済の回復に伴い、海外子会社の業績改善による受取配当金の増加は予想されるが、所得収支の受取の多くを占める米国債の利子受取額が円高の影響で足踏みすることが予想されるため、所得収支は回復力に乏しい動きが予想される。

以上より、先行きの経常収支は、貿易収支の改善を主因として、緩やかに持ち直しが続く見込まれる。

経常収支（季調値）



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

